成語林

故事ことわざ慣用句

東京大学名誉教授
尾上兼英［監修］

旺文社

成語林

故事ことわざ慣用句

尾上兼英[監修]

D

教育と情報

Obunsha

雑誌
〈高校合格情報誌〉
高校合格
〈大学合格情報誌〉
螢雪時代　私大螢雪
短大螢雪
大学受験講座ラジオテキスト

書籍
〈小・中・高〉参考書
教科書・語学教材
辞典・事典
児童書・スポーツ書
図鑑・科学書・歴史書
一般書・ビジネス書

放送
大学受験ラジオ講座

事業
模擬試験・実力テスト
通信添削指導（旺文社ゼミ他）
全国学芸科学コンクール
名作読後感想文全国コンクール

ニューメディア
O-THE・TOPゼミ・CAIスクールシステム・旺LABO

〔関連団体〕
財団法人 日本英語教育協会
（通信教育、雑誌・放送〈百万人の英語〉）
財団法人 日本LL教育センター（LL教室）

●図書案内（小、中、高別）送呈
〒162 東京都新宿区横寺町　旺文社

成語林

故事ことわざ慣用句

1992年9月1日　初版印刷
1992年9月20日　初版発行

編者　旺文社
発行人　赤尾一夫
編集人　新井政義
印刷所　凸版印刷株式会社
付物印刷所　開成印刷株式会社
製本所　凸版印刷株式会社
株式会社　市川製本所
製函所　清水印刷紙工株式会社

発行所　株式会社　旺文社
162　東京都新宿区横寺町
《電話》本書の内容に関するお問合せは、編集 03(3266)6356
ご注文、乱丁・落丁に関するお問合せは、販売 03(3266)6416

ISBN4-01-077830-X　207220
©旺文社　1992
(許可なしに転載，複製することを禁じます)
Printed in Japan

はじめに

口調のよい短い表現の中に、機知に富み含蓄のある内容を盛り込んだ故事ことわざは、昔から広く人々に生きる上での指針や世渡りのコツ、また心の潤いを与え続けてきました。それは今でも同様で、わたしたちは日ごろ目にし耳にする故事ことわざの中に、人生の英知や人情の豊かさを強く感じ取ることができます。将来においてもそれは変わることがないでしょう。故事ことわざが、時代や地域を越えた人間性の根源から発せられたものであり、なるほどもっともだ、うまいことを言うものだという万人の頷きの所産だからです。わたしたちは、日常の会話や改まってのスピーチに、また文章中に故事ことわざを引用することによって、話にいちだんと味わい深い膨らみをもたせることができます。

しかし最近、故事ことわざや慣用句を間違えて使う人が増えてきました。「かわいい子には旅をさせよ」を、レジャーとしての旅をさせよの意に解したり、「流れに棹さす」を、時の流れに逆らって物事を行うの意に解したりする類です。こうした誤用の増加は、わたしたちの生活環境の変化が一因となっているように思われます。

かつては、三世代の者が一つ屋根の下に暮らす家庭も多く見られました。そこでは日々の団欒の場で、故事ことわざは年配者から年少者へと口伝えで頻繁に語られていました。しかし、最近は核家族化の進行とともに、そうした場が減少傾向にあります。また、テレビの魅力が、家族一同の目を映像へと傾かせ、語らいや読書の時間を少なくさせています。この傾向はさらに進んでいくものと思われますから、今後も故事ことわざや慣用句の誤った理解・使われ方は多くなっていくことでしょう。

本書は、そうした状況を踏まえ、故事成語、ことわざ、格言、名言、四字熟語、慣用句などの正しい意味・使い方を示すべく刊行したものです。最近の人々の間違えやすい点は特に注意欄で指示しました。その他、語源欄・参考欄を設けたり、頻出する故事成語には原文・読み方・訳や補足説明を付したり故事欄を設けたり、読んで楽しい囲み記事を設けたりして、実用的で興味深い特長を多々盛り込んでいます。英語のことわざ、似た意味・反対の意味の故事ことわざもわかります。別冊に「世界の名言・名句」も収録しました。

本書が広く迎えられ、豊かな言語生活を築いていく上で役立てていただければ、これに過ぎる喜びはありません。

終わりに、本書の刊行につきましては、監修の労を執られた尾上兼英先生、校閲および頻出項目の執筆に尽力された林茂夫先生、同じく頻出項目の執筆に当たられた新開高明先生、英語のことわざの執筆に当たられた城山正幸先生をはじめ、多くの方々の長期にわたる一方ならぬ協力をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げる次第です。

一九九二年　八月

旺文社

凡例

〔1〕見出し語句について

この辞典は、中学生・高校生から一般社会人までを対象とし、昔から伝えられてきた成語、また、現代生活で使われる成語――故事・ことわざ・格言・名言・四字熟語・慣用句等の類――を幅広く収録したものである。なお、現代的視野から、カタカナ語を含む慣用句なども取り上げてある。別冊「世界の名言・名句」採録のものも含めて、全見出し語句数は約一七、〇〇〇項目である。

(1) 配列は、現代仮名遣いによる読みの五十音順（あいうえお順）とした。

(2) 見出し語句中、それが付いても付かなくても使われるものは、その部分を（　）に包んで掲げた。

(3) 同一の意味をもちながら表現の異なる語句が二つ以上ある場合には、基本的なもののほうに解説を付し、他方は⇩印によってその語句を参照させた。（⇩印付きの見出し語句は、その太文字も少し小さくした。）

〔2〕解説について

(1) 見出し語句中の難解な字句は、〔　〕内にその語義を明示した。

(2) 解説文中の難解な部分には、〔＝　〕内にその訳注を付した。

(3) 解説文中での補足説明は（　）に包んで付記した。

(4) 意味の違いによる語義の区分けは、①②③……で示した。

(5) 他の項目を参照させる場合には↓印を付した。

(6) 表記は現代仮名遣いによった。

なお、内容を広く深く明らかにすべく、また、実際に活用する場合に役立つように、次のような欄を設けて詳述した。

(1) 用例　用法　――

その語句が実際にどう使われるか、その典型的な具体例を用例欄に掲げた。その際、見出し語句に相当する部分には傍線を付した。（会話体のものは「　」に包んで示した。）また、用法上特に注意すべき点を用法欄に付記した。

(2) 語源　――

その語句の起源・由来を語源欄で詳述した。

(3) 出典　――

その語句の出所となっている書名・作品名を出典欄に明示した。（すべて読み仮名付き。）巻数・編名等も努めて付けるようにした。また、必要に応じて原典の読み下し文を示した。その際、見出し語句に相当する部分を中太罫（――）で省略したものがある。なお、わが国の古典からの引用の場合には、仮名の部分は歴史的仮名遣いによった。

(4) 《原文》《読み方》《訳》

中学・高校の教科書に採録されている故事成語、比較的よく知られていて使われることの多い故事成語は、原文・読み方・訳を付して、その語句の掘り下げた理解がなされるように配慮した。（上に罫線を付した。なお、見出し語句および語義解説に相当する部分を中太罫（――）で省略したものもある。）

(5) 故事　――

その語句についての重要な故事を、故事欄に詳述した。必要に応じて、◇――印のもとに関連事項の説明を補足したものもある。（上に罫線を付した。）

(6) 注意　参考　――

意味・読み方・書き方・使い方等の上で、特に誤りやすい点を注意欄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

で指示した。また、見出し語句についての興味深い様々な関連知識を参考欄に付した。

(7) 英 ――

必要に応じて、その語句とほぼ同意と見られる英語のことわざを示した。↓印で、巻末「英語のことわざ」を参照させたものもある。

(8) 類 対 ――

その語句と似た意味をもつものを類語欄に、反対・対応の意味をもつものを対語欄に列記した。

(9) 囲み記事、挿絵・図表

本文中に、幅広いことばの理解がなされ、読んで楽しく役に立つ囲み記事を挿入した。（表見返しにその一覧を掲載。）また、必要に応じて挿絵・図表を示し、視覚的理解の徹底を図った。

(10) 巻末記事

「出典解説」「語中キーワード索引」「英語のことわざ」を掲載。

図表一覧

相性について……二
七福神……一六
八卦……三〇
ギリシャ文字……四七
近世の貨幣単位……七九
いろは歌……一〇五
有卦・無卦について……一一五
字形の違いの覚え方　五例……一三七
「鬼」の誕生……一七四
五体字例……一九六
合従連衡　地図……二二二
干支……二六二
起承転結……二七四
十二支の時刻配当……三一八
「君子」のもついろいろな意味……三四四
孔子……三七六
長寿の祝い……三九一
極楽……三九五
ソメイヨシノの開花日……四四六
日本の苗字ベスト10……四五二
回忌について……四六三
四苦八苦……四七五
さまざまな地獄のようす……四七七
地震の震度について……四八三
長さの単位「尺」の起源と変遷……五〇六
年齢の異称……五〇八
須弥山世界図……五二三
「小人」のもついろいろな意味……五三二
諸子百家……五四四
月の名称……五五五
「仁」とは何か……五五六
六曜……六四三
二十四節気……六四五
方位……六七四
天一と天一天上……七五五
冬至前後の昼の長さの変化……七七四
気温の春と光の春……七七五
土用について……八〇四
節句について……八二九
旬（魚貝類・野菜類）……八四六
月別にみる台風の平均的進路……八五二
十悪・十善……九〇五
「八専」について……九〇六
平年の初雪日……九〇七
彼岸について……九三五
平仄について……九七九
友情・朋友に関する成語……一〇一四
うおへんの文字の例……一〇二九
六波羅蜜……一〇三八
立春について……一二一九

監修者のことば

故事とか成語というと、いかにも古くさいと思う人もいるだろう。新しい時代に向かって生きる若者には必要ではないという人もいるかもしれない。しかし、何かを始めようとする時や迷路に入り込んで決断を必要とする時には、これまでの経験をもとにして打開の道を探ろうとするだろう。だが、自分一人の経験した範囲は僅かなものである。そこで視野を広げて他の人の経験からも学ぼうとする時、長い年月の間に語りつがれてきた故事ことわざや成語が、多くの人の知恵の結晶であり、それ故、今も生命を保っていることに気がつくだろう。

ところで、ある状況のもとである判断が必要となる場合がある。九九パーセントこうすべきであると思っても、一パーセントの迷いが残ることがある。何故ならば、未来のことを予(あらかじ)めすべて見通すことは人間にとって不可能だからである。その際の決断を促すものとして、故事ことわざや成語がスプリングボードの役割を果たし、これからの行動を勇気づけてくれるのである。

ところが、故事ことわざや成語には正反対のことをいうものがある。たとえば、「長いものには巻かれろ」とか「泣く子と地頭には勝てぬ」「寄らば大樹の陰」といえば、消極的にであれ積極的にであれ、大きな力を持つものに従うのが、より良い選択だという判断を示すものである。反対に、「鶏口となるも牛後となるなかれ」「一寸の虫にも五分の魂」「千万人といえども吾往(われゆ)かん」といえば、周囲がどのような状況であろうと自分の信念を貫き通そうという決意の表明となる。また「思い立つ日を吉日」というかと思えば、「急(せ)いては事をし損ずる」とか「果報は寝て待て」というのもある。このような場合、どちらを採るのが正しいか？　これは一パーセントの問題だから、それぞれの状況に応じた自分の判断に依(よ)って選択すべきであり、故事ことわざや成語がすべての答を用意してくれるわけではないことも知っておく必要が

ある。

現在使われている故事ことわざや成語は、もとを探ると中国の古典中に散りばめられた故事ことわざや、日本の作品に引かれた成語にたどりつくことが多い。ところが、謡曲や江戸の読本（よみほん）、歌舞伎の脚本などには、中国の成語が巧みに和訳され、もともと日本の成語であったと思わせるものがある。たとえば、「どういう風の吹き回しか」などは、いかにもしゃれた表現であるが、もとをたどれば「今日甚麼風吹到這裏」（今日はどういう風が吹いてここへ来たのやら）という中国の成語にいきつくのである。中国からの影響の大きいことがわかる。また近年になるとヨーロッパ諸国から、とくに聖書からの成語も使われることが多くなった。ところが、それらのことばや慣用句がひとり歩きをはじめるために、長い年月の間にもともとの意味と違った用法が生まれることがある。とくに現在のようにテレビなどのマス・メディアが発達すると、わざと誤用して人目を引こうとする人が現れる。ジョークとしての効果をねらっているのであるから、それはそれでよいのであるが、そのために誤用のまま通用すれば困ったことになる。「情けは人のためならず」といえば、困っている他人を助けておけば、将来自分が困った時に助けてくれる人が必ずあるだろうという助けあいの人間関係を作っておこうという意味であるが、最近では、他人が困っているからといって助けては、人に頼る弱い人間にしてしまうからかえって本人のためにならないというように使われることがある。本来の意味と違った用法の例としては、「犬も歩けば棒に当たる」は、犬でもうろうろ歩きまわると棒で殴られることがあるから、まして人間は用もないのに出歩くなという意味であったようであるが、今では家に引きこもっていないで散歩をすれば、よいことに出会うかもしれないというように使われている。また「早起きは三文の得」は、もともとは早起きしても三文の得にしかならないという怠け者の言い訳であったのが、早起きを奨励すべく使われるようになったといわれている。「縁の下の力持ち」の「力持ち」は、石などの重いものを持ち上げて見せる芸人を指していったので、神社やお寺の縁の下では目立たないので無駄な努力という意味で使われていたようであるが、今では、目立たないが陰で支えている人の誉めことばとなっている。また、「蒔（ま）かぬ種は生えぬ」といえば、だから諦（あきら）めなさい

と慰めているのか、だから蒔きなさいと勧めているのか。「いつも月夜に米の飯」といえば、こんなありがたいことはないという意味で使うが、そんなに世の中は甘いものではないぞという戒めの意味もあるのではないか。これらはどうやら、どちらにも使われてきたようである。このように時代によって用法が変わりやすいのは、日本のことわざに多いようである。中国の故事については、近代まで比較的誤用が少ない。それは、中国の故事ことわざは、明治時代までのインテリにとっては中国の古典が必読書であったので、書物のなかで定着した用法を正しく守ってきたからであろう。とはいうものの、今日では書簡文などで、ごく普通に使われる「天高く馬肥ゆるの候」が、『漢書』匈奴伝を出典としており、秋になって強く逞しく肥えふとった馬にまたがり、収穫したばかりの穀物をねらって匈奴が侵入してくる季節になったから警戒せよという意味であったと知ると、平和のありがたさをしみじみと感じるのである。そうした違いを念頭において、用法の変化を考えてみると、時代によって人間の知恵の進歩も知ることができ、故事ことわざや成語に対していちだんと興味も深まることであろう。

日本語は便利なことばであって、外国語を自由に取り入れて我がものとすることができる。日本語の中にカタカナ語が氾濫するのは、もとの国のことばを日本語にそのまま取り入れた結果である。現代は横文字の国との交流が盛んなため、こうした現象が見られるが、明治維新以前はもっぱら中国と交流をしていたので、中国語が日本語として通用していた。そのため、故事ことわざ・成語で中国に起源をもつものが非常に多い。たとえば、「朝三暮四」は、猿使いが餌のとちの実を朝は三とし暮れは四としようといったところ、猿が怒ったので、朝四、暮れに三とすることで納得させたが、全体の数は変わらないので、算数に弱い猿をうまくなだめた故事として理解されている。しかし、戦国時代の乱世に生きた猿は、朝食の後にかならず夕食があるとは信じていなかったので、一個でも早く確実に口にしようと考えたとすれば、決して猿知恵と笑うわけにはいかない。故事ことわざの成立した背景を考えてみると意外な発見がありそうである。また「鶏口となるも牛後となるなかれ」などは、蘇秦が韓・魏・斉・楚・燕・趙の六国を連合して秦に対抗する政策を韓王に説明する時に使ったことわざで、秦に服従して牛の尻のようになるより、鶏

のような小国であろうと口になったほうがよいと勧めた故事による。このように、必要に応じて文章や会話中に適切な故事ことわざや成語を用いると、まわりくどい理屈抜きに相手の心を摑むことができるのである。

また、中国には〝歇後語〟といって、なぞなぞのような成語がある。これは日本ではあまり使われないので省略したが、たとえば「孔子様のお引っ越し」といえば、「書物」ばかりということになる。日本漢字音では「書」と「輸」は同音ではないが、中国音では同音であって「輸」は勝負の負けの意味である。田中角栄首相が日中の国交回復のために訪中し周恩来首相と会談した後、毛沢東主席を書斎に訪問した際に、毛主席が「喧嘩はもうすみましたか」といいながら『楚辞集注』を田中首相に手渡したことが報道された時に、日本人はどういう意味だろうと首を傾けたものであった。たぶん、記念の品として手近な書物を贈り物としたのであろうが、もし田中首相がこの〝歇後語〟を知っていたら、どういう対応をしたか興味のある事件であったといえよう。

こうしたやり取りやその効果は、今日も一向に変わりがなく、名演説やしゃれた文章には故事ことわざや成語、〝歇後語〟などがひんぱんに使用されており、それが簡潔で緊張した文章にし、感銘を与えている。

ところで、故事ことわざや成語を使って効果をあげるためには、相手の意表をつくのが最も有効である。相手がはっとした瞬間に、自分の土俵に乗せることができるからである。そこで、極端に対照的な事柄が取りあげられた。そのために、現在は差別語として排除されることばも多くみられる。本書では、それらは採用を極力見合わせた。古い書物を読む際に不便であるとのお叱りがあるかもしれないが、我々としては、そのような成語は平等な社会が成立すれば自然に消滅すると思っており、そうした時代の一日も早く実現することを熱望している。そのためには、今後はこれらの成語が使用されることは好ましくないと考えたからである。

ことばは、意志伝達の手段である。従って、故事ことわざや成語についても、正確に使わなければとん

でもない誤解を生じることになる。それが原因で友情がこわれることになるかもしれない。そこで、本書では、故事ことわざ、成語の出典を必要に応じてできるだけ示して正確な用法が理解できるように配慮した。また語源や参考を付し、用例をあげて誤用が避けられるように工夫をした。とくに誤用しやすい成語については図表や囲み記事で特記をした。類語を多く提示したのも、微妙な相違を示し正確な用法を期待したためである。比較的ありふれたことばや日常多用される成語、ことわざの豊富なことも本書の特徴といえよう。また、名言・名句は故事ことわざ、成語とやや性格が異なるので、『世界の名言・名句』として別冊にした。

もともと辞典は必要に応じて引くものであるが、『世界の名言・名句』とともに、時間が許せば読む本として活用されることを期待している。おもしろい発見があるだろうと思うからである。読者の工夫によってさまざまな活用方法が開拓されれば、監修者としても喜びに堪えないところである。

平成四年　八月

尾上兼英

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あ

ああ言えばこう言う

相手の言うことをすなおに受け入れずに、ひとつひとつ理屈をつけて反対すること。

用例 ああ言えばこう言う、まったく始末に負えないよ、うちの息子は。

類 西と言ぃえば東と言ぃう。右と言ぃえば左。山と言ぃえば川と言ぃう。

アーチをかける

野球で、ホームランを打つ。

用例 今日もまたスター選手がアーチをかけてファンを喜ばせた。

哀哀たる父母、我を生みて劬労す

〔「哀哀」は、悲しみあわれむさま〕いたましくも父母は、私を生み育てるのにたいへん苦労されたことだ。父母はもうこの世になく、成長した自分が役にもたたず孝養できなかったことを嘆く、古代中国の詩の一節。

出典 〔『詩経』小雅・蓼莪〕蓼蓼たる莪〔＝すくすくと伸びた美味の若菜〕、莪にあらずこれ蒿〔＝生長すると食べられぬかたいよもぎになってしまった〕、——。

合縁奇縁

人の交わり、特に男女の仲というものは、自然と、合う、合わぬがあるものだが、それもみな不思議な縁によるものだということ。「愛縁奇縁」「合縁機縁」とも書く。

用例 家内とは来年で金婚式ですが、そもそもなれそめは、まことに合縁奇縁でしてな。

類 縁ぇんは異ぃなもの。

相生いの松

黒松と赤松との幹が合わさり、一本の木のように生え出た松。夫婦の契りが深く、そろって長生きすることの象徴とされる。

参考 兵庫県高砂市の高砂神社にあるものが有名。

愛多き者(は)則ち法立たず

愛情も程度を越すと、民衆は図に乗ってしたいことをし、法が守られなくなるということ。

出典 〔『韓非子・内儲説上』〕愛多き者は則ち法立たず、威寡き者は則ち下上を侵す〔＝権威が弱いと下の者が上の者をばかにする〕。

愛多ければ則ち憎しみ至る

度を越えた愛情を受けることが多ければ、人から憎しみを受けることになる。上の人からの愛情に甘えてはならないといういましめ。

出典 〔『亢倉子』用道〕恩甚しければ則ち怨み生じ〔＝めぐみを受けることが度を過ぎると人の恨みをまねき〕、——。

愛、屋烏に及ぶ

（その人を愛すれば、その人の住む家の屋根にいる烏までかわいく思われる意から）相手に愛情をもつと、相手のすべてのものが好ましくなることのたとえ。

出典 〔『説苑』貴徳〕その人を愛する者は屋上の烏を兼ね、その人を憎む者はその余胥を憎む〔＝その人の召使までが憎らしくなる〕。

参考 烏は一般的には人にきらわれる鳥なので例に出したもの。

類 屋烏の愛。

対 坊主が憎けりゃ袈裟まで憎い。

愛敬がこぼれる

だれに対してもにこにことして人をそらさず、感じのよさが自然にあふれている。「愛敬」は「愛嬌」とも書く。

用例 あの娘は愛敬がこぼれるような感じのいい子だ。

愛敬を振り撒く

あちらこちらに、親しみや好感をもたれるような言動をする。「愛敬」は「愛嬌」とも書く。

用例 あの猿回しのお猿さん、盛んに愛敬を振りまいているわ。

用法 こっけいな言動をする場合に言うことが多い。

匕首に鍔を打ったよう

（あいくちは本来つばのない短刀なので、それにつばをつけると不釣り合いになることから）不似合い、不調和なことのたとえ。「匕首」は「合口」とも書く。

類 小刀に金鍔を打ったよう。

相碁井目

「相碁」は、対等の実力者が置き石なしで打つ対局。「井目」は、碁盤の目に記された九つの点で、技量に大差があるとき、先手はここにあ

らかじめ黒石を置いてから打つ〕同じことをしても、人の腕前・技量にはひどく差があるということ。

挨拶は時の氏神

〔「挨拶」は、仲裁の意〕けんかや争いごとの中に入って仲裁してくれる人は、その場に氏神様が出現したようにありがたく好都合なものだから、その仲裁にはすなおに従うのがよいという教え。「仲裁は時の氏神」ともいう。

愛して(も)その悪を知り、憎みて(も)その善を知る

愛してもその人の短所を見分け、憎んでもその人の長所を見つける。愛憎の感情にとらわれないで、理性的に人の善悪・長短を判断しなければならないといういましめ。

〔出典〕〔『礼記』曲礼・上〕

《原文》賢者狎而敬之、畏而愛之、愛而知其悪、憎而知其善。

《読み方》賢者は狎れて（も）之を敬し、畏れて（も）之を愛し、――。

《訳》賢人は人と親しくなっても相手をうやまってあなどることをせず、うやまっても愛することを失わず、また、――。

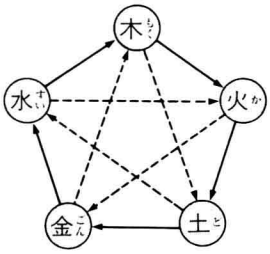
相性が良い

①性の合う組み合わせである。互いに性格がよく合う。特に、縁組などでいわれる。②勝負事などで、その相手とするときにはなぜかいつも勝つ。合い口がいい。（①②「相性」は「合い性」とも書く）

〔用法〕反対の意味を表す場合には「相性が悪い」という。

相性について

縁組などで言われる「相性」は、ふつう五行説による「相生」「相剋（克）」に基づく。相生とは、たがいに助けあうよい関係で、木と火、火と土、土と金、金と水、水と木の関係をいう。相剋とは、たがいに背を向けてきずつけあう悪い関係で、水と火、火と金、金と木、木と土、土と水の関係をいう。図示すると、つぎのようになる。



→は、五行相生関係。木→火→土→金→水の順序。

⇢は、五行相剋関係。木火土金水が一つおきに結ばれたもので、木→土→水→火→金の順序。

これを人の生年の「九星」、一白水星・二黒土星・三碧木星・四緑木星・五黄土星・六白金星・七赤金星・八白土星・九紫火星に当てはめ、二人の相性をみるわけである。例えば、五黄土星生まれの人は、九紫火星・六白金星・七赤金星生まれの人とは相性がよく、三碧木星・四緑木星・一白水星生まれの人とは相性が悪いということになる。もとより科学的な根拠はない。

愛する所には駑馬を相するを教う

昔、伯楽という馬の鑑定の名人が、自分のきらいな者には駑馬〔＝一日に千里を走る名馬〕の鑑定法を教え、自分の好きな者には駑馬〔＝ふつうの馬。駄馬〕の鑑定法を教えた。名馬はごくまれにしかいないので鑑定の利益は少ないが、ふつうの馬は毎日売買されるために鑑定の利益が多く、このほうが役にたつのでそうしたという話から、愛憎に対する微妙な人間感情を説いたもの。

〔出典〕〔『韓非子』説林・下〕伯楽その憎むところの者に千里の馬を相するを教え、――。千里の馬は時に一あるのみにして、その利緩く、駑馬は日々售れて〔＝毎日売れて〕、その利急なればなり。

愛想が尽きる

すっかりいやになる。

〔用例〕二〇年来のひいきチームだったが、このところの不振と無気力には愛想が尽きたよ。

〔用法〕「愛想を尽かす」という形でも使われる。

〔類〕愛想もこそも尽っき果てる。

愛想尽かしは金から起きる

女が男に対して愛情を失ったり別れ話を持ち出したりするのは、お金がじゅうぶんにもらえないことが原因となる場合が多い。

〔類〕金の切れ目が縁の切れ目。

愛想もこそも尽き(果て)る

〔「こそ（小想）」は、「あいそ」にごろを合わせたもので意味はない〕「愛想が尽きる」を強調して言うことば。

愛想をする

①人を丁重にもてなす。また、人に好感をもた

れるような態度をとる。②店で飲食代などの勘定をする。（①②「愛想」は「あいそう」とも読む）

用例 ①この子、まだ一歳半なのに、人があやすと愛想をするのね。

用法 ②は和風の料亭・飲食店などで、多く「おあいそ（をお願いします）」の形で用いられる。

愛想を尽かす ⇩ 愛想が尽きる

会いたいが情、見たいが病

恋心がつのってくると、会いたい、顔を見たいという思いが激しく燃えてくるが、それは男女の情愛のつねであり、時には熱病にかかったようにもなるものだということ。

相対の事はこちゃ知らぬ

お互いどうしが話しあって決めたことは、第三者には関係のないことだ。

用法 こちらになんの相談もなく決めたことの結果が悪くてなんとかしてほしいと頼まれても困ると、拒絶するときによく用いる。

参考 相＝鮎あゆ、対＝鯛たい、こち＝鮴こちと、三つの魚の名をかけている。

逢いたい見たい

会って実際に姿を見たい。恋しくなつかしく思う心が切実なことをいう。

開いた口が塞がらない

相手の態度や行為にあきれかえったり、あっけにとられたりして、ものも言えない。

用例 人を人とも思わない相手の態度に、開いた口がふさがらなかった。

開いた口には戸は立たぬ ⇩ 人の口には戸が立てられず

なんの努力もしないのに、思いもかけない幸運が舞い込んでくることのたとえ。「開いた口へ餅」ともいう。

類 棚から牡丹餅。浅あさみに鯉こい。兎うさぎの罠わなに狐きつねがかかる。

開いた口へ牡丹餅

あいだてないは祖母育ち

〔「あいだてない」は「あいだちなし」の転で、無遠慮だ、自分勝手だなどの意〕祖母の手で養育された子は甘やかされて、礼儀知らずで気ままになりやすいということ。

類 祖母育ちは三百安。年寄りの育てる子は三百文安くなる。

間に立つ

問題が生じている双方の間に入って、仲立ちや周旋をする。

用例 部長が間に立って、険悪だった二人の仲もようやく元に戻った。

類 間へ入る。

間へ入る

対立している者どうしの中に立って仲裁し、和解をすすめる。↓間に立つ

間を裂く

結びつきの深い両者を、強引に引き離す。

用例 彼はさかんに誹謗中傷して、ぼくらの間を裂こうとしているらしい。

相槌を打つ

相手の話に調子を合わせ、共感や感心あるいは次の話を引き出すような短いことばを入れる。

用例 適切に相槌を打つことは、聞き上手の第一条件である。

語源 鉄を打ち鍛えるとき、こちら側と向こう側の者とが調子を合わせて交互に打ちあう槌を「相槌」ということから出たことば。

注意 「相槌」を「合槌」と書くのは誤り。

〔相槌〕

相手変われど主変わらず

相手はそのつど変わっても、こちらはつねに同一人で変わらず、同じことを繰り返しているようす。

相手にとって不足はない

相手の力も相当なもので、闘ったり競い合ったりするのに申し分ない。

用例 この機械の受注を争うのはあの会社か。よし、相手にとって不足はない。最後までがんばるぞ。

相手のさする功名

自分の実力や努力によるのではなく、相手の力が劣っていたりミスをしたりしたために、予想外の好結果を得ること。「敵のさする功名」

ともいう。

相手のない喧嘩はできない

けんかは相手がいてこそできることであって、どんな荒くれ者でも相手をする者がいなければけんかにはならない。けんかをしかけられても相手になるなといういましめ。

英 ↓巻末「英語のことわざ」(352)

類 相手なければ訴訟なし。一人喧嘩はならぬ。

相手の持たする心

相手の働きかけ方によって、こちらの心の持ち方も変化するものであるということ。

愛に愛持つ

かわいい上にもかわいい。愛嬌がこぼれるようなようすを表すことば。

用例 「あいあい」と愛に愛持つ女同士。〔浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』〕

愛の巣

愛し合っている男女のすまい。愛し合う者どうしの住居。

間の手を入れる

会話や物事が行われているときのわずかな合間に、すばやくことばをさしはさむ。

用例 客席からすかさず間の手を入れる。

用法 「間の手が入る」という形でも使われる。

語源 邦楽で、唄と唄との間に入れる三味線だけの短い演奏部分を「間の手」といったことから出たことば。

愛は惜しみなく与う

人を愛すると、自分のもつすべてのものをその人に与えても惜しくない。

参考 『新約聖書』コリント人への第二の手紙の中に見られるパウロの説いた愛の姿であるが、有島武郎(一八七八～一九二三)は『惜みなく愛は奪ふ』という評論を発表し、愛は対象をより多く自分の中に摂取して自分の生活の一部分としてしまうと論じている。

愛は憎悪の始めなり

人を愛すると度を越えることがあり、それがかえって憎み合うもととなる。人の愛情のありかたについてのいましめ。

出典 〔『管子』枢言〕愛は憎しみの始めなり。徳は怨みの本なり〔=めぐみが深すぎると、それがかえって恨み合うもととなる〕。

愛別離苦

(仏教でいう八苦の一つで)この世には親子・兄弟・夫婦など愛し合う者が生別や死別する苦しみがあり、これは避けられない定めであるという教え。

出典 〔『法華経』譬喩品〕

参考 八苦は、生・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦〔=憎い者と会う苦しみ〕・求不得苦〔=求めても得ることのできない苦しみ〕・五取蘊苦〔=身心から盛んに起こる苦しみ〕の四つを加えていう。↓怨憎会苦

類 会者定離

藍より出でて藍より青し

⇨ **青は藍より出でて藍より青し**

愛を以て孝なるは難し

(敬わなければいけないという意識のもとに親に孝行を尽くすことを形で表すのはやさしいが)自然の情から出た愛の気持ちをもって孝行を尽くすのはむずかしいということ。

出典 〔『荘子』天運〕敬を以て孝なるは易く、――。愛を以て孝なるは易く、而して親を忘るるは難し〔=親の存在を意識しない孝行はむずかしい〕。親を忘るるは易く、親をして我を忘れしむるは難し〔=親におのれの存在を意識させない孝行はもっとむずかしい〕。

会うた時に笠を脱げ

⇨ **会うた時に笠を脱げ**

会うは別れの始め

会えば必ず別れる時が来る。それはまさに始めがあれば終わりがあるのと同じで、人の一生もまた無常であるという教え。仏教の『遺教経』で説く「会者定離〔=会う者はいつか必ず離れる定めにある〕」などから出たことば。

↓会者定離

英 ↓巻末「英語のことわざ」(49)

合うも不思議合わぬも不思議

占いや夢というものは、当たることもあり当たらないこともあるもので、当たるほうがむしろ不思議というべきだということ。「合うも夢合わぬも夢」ともいう。

類 当たるも八卦当たらぬも八卦。

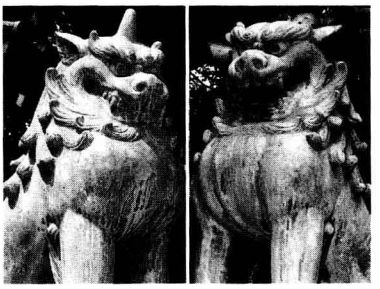
阿吽の呼吸

協力して一つの物事をするときの、微妙なお互

いの気持ちや調子。また、それがぴったり合っていること。「阿吽」は「阿吽」とも書く。

語源 サンスクリット語で「阿」は最初の字母、「吽」は最後の字母（英語でいえばAとZに当たる）で、吐く息と吸う息を表しており、それがぴったり合うことをいう。

参考 寺院の山門の左右にある仁王や、神社の社前に置く狛犬の一対は、片方が口を開けた「阿形」で、片方は口を閉じた「吽形」。



狛犬の「吽形」（左）、「阿形」

敢えて後れたるに非ず、馬進まざるなり

〔「後れる」は、ここでは敗れて退却するとき味方の最後尾となって敵を防ぐ意〕自分の功名を誇らずにへりくだることのたとえ。

出典 〔『論語』雍也〕

故事 魯の大夫の孟之反は、味方の軍が敗れて退却したとき、その殿〔＝自軍の最後尾〕をつとめて敵を防ぎ、味方を援護する功績があったが、味方の城門に入るとき、ひかえめな彼は馬をむちうちながら、「自分は進んでしんがりをつとめたわけではない。この馬が進まなかっただけだ」と、さりげなく言ったという。

敢えて主とならずして客となる

進んで自分のほうから行動を起こそうとしないで受けて立つ。進むよりも退いて事を運んで安泰をはかるのがたいせつであるということ。

出典 〔『老子』六十九章〕兵を用うるに言あり〔＝兵法にこんなことばがある〕。吾れ――。敢えて寸を進まずして、尺を退く〔＝無理をしてわずか一寸前進するよりは、大きく一尺後退したほうがよい〕、と。

敢えて天下の先とならず

世の中の人の先頭に立とうと争わないで、ひかえめな態度を保っていれば、自分を生かすことになるといういましめ。

出典 〔『老子』六十七章〕――、故に能く器の長を成す〔＝控え目な態度のために、かえって人のかしらとなる〕。

参考 「敢えて主とならずして客となる」とともに、このことばも老子が人生の態度として「無為の道〔＝人為的に作為しないで、自然のままに生きる道理〕」を述べたものである。

青息吐息

ひじょうに困って、ため息ばかりが出るような状態。

用例 株価の暴落で、投資家たちは青息吐息のありさまだ。

仰いで唾（を）吐く ⇩ 天を仰いで唾す

仰いで天に愧じず

心にやましいところがなければ、天を仰いで少しも恥ずかしいと思うことがない。自身にうしろめたい点がなく公明正大であること。

出典 〔『孟子』尽心・上〕

参考 このあとに「俯して人に怍じざるは二の楽しみなり〔＝下のほうを見て人々に恥ずかしいことがないのが、第二の楽しみである〕」と続く。このことばは、「君子の三楽〔＝君子の持つ三つの楽しみ〕」のうちの二番目にあたる。↓君子の三楽

類 俯仰天地に愧じず。

青柿が熟柿弔う

まだ青く固い柿の実が、熟した実が落ちてつぶれたのを見てかわいそうに思う。遠からず自分も同じことになるのを忘れ、他をかれこれ言うおろかさのたとえ。

類 五十歩百歩。猿の尻笑い。目糞鼻糞を笑う。

青くなる

恐怖や不安などのために、顔が血の気を失って青白くなる。

用例 だいじな書類の入ったかばんをタクシーの中に置き忘れて青くなった。

類 真っ青になる。

青筋を立てる

こめかみに血管を青く浮き立たせ、かんかんになって怒る。

用例 額に青筋を立てて怒る。

青田から飯になるまで水加減

稲は、水田にあって青いときは水の豊富さが収穫高に影響するし、とれた米を飯に炊くときは、水の量によって味がよくも悪くもなるとい

うこと。一貫した配慮の必要をいう。

青田を買う

企業が正規の採用試験の期日より前に、内々に学生と入社の契約をする。

用例 先んずれば人を制すですからなあ、人材を確保するには、青田を買うのも必要悪ですかな。

用法 「青田買い」という形でも使う。なお、「青田刈り」ともいうが、もともとは「青田買い」が正しい。

語源 まだ稲が実らず青いうちに、収穫高を予測してその田の米を買い占めるやり方から出たことば。

青菜に塩

（青い菜っ葉に塩をかけるとぐんにゃりとなることから）急に元気をなくしてしょげるさま。

用例 奈久四郎は青菜に塩のしほしほと急ぎ役所へ出てゆく。〔浮世草子『教草女房形気』一三〕。元気だった彼も再三の失敗で青菜に塩だ。

類 蛞蝓に塩。蛭に塩。

青菜は男に見せな

〔「見せな」は、見せるなの意〕青い野菜は、なまのうちはかさばって大きく見えるが、ゆでると極端に小さく縮んでしまう。男はふつう、そういうことを知らないから、なまのうちから見せておくと、あとで減らしたのではないかといらぬ疑いをもつ可能性がある。だから青菜を男に見せないほうがよいということ。

用法 事実を知らない者に疑われそうなことは、なるべくそっとしておいたほうがよいというたとえとしても使われる。

類 倹しい男に青菜見せな。

青は藍より出でて藍より青し

（青色の染料は藍という草から採るが、それで染めた色は原料の藍草よりもさらに青いという意から）弟子がその師よりもさらに優れていることのたとえ。略して「藍より出でて藍より青し」ともいう。

〔藍〕

出典 〔『荀子』勧学〕

《原文》学不レ可二以已一。青取二之於藍一、而青二於藍一、冰水為レ之、而寒二於水一。

《読み方》学は以って已むべからず。青は之を藍より取りて藍よりも青く、冰は水之を為りて水よりも寒し。

《訳》学問は中途でやめるべきではない。青色は藍の草からとり出すが、しかもその藍色よりもさらに青く、氷は水からできるが、水よりもさらにつめたいものだ。

参考 もともとは学問に励むことの重要性を説くための比喩で、勉学を重ねれば人はさらに高度の領域に達するものであるという趣旨であった。

類 出藍の誉れ。氷は水より出いでて水より寒し。

青葉は目の薬

青葉の緑は、心をさわやかにすると同時に、目の疲れを回復させる効果があるということ。

参考 『毛吹草』に「夏山は目の薬なる新樹かな」（貞継）という句が載る。

煽りを食う

そばにいたり、かかわりがあったりしたために、予想外の災難や影響を受ける。

用例 スーパーどうしの安売り競争のあおりを食って、商店街は青息吐息のありさまだ。

赤い信女

夫に死なれた婦人。

語源 「信女」は仏教における女性の戒名の一つで、男性の「信士」に対する呼称。夫が亡くなると墓石に戒名を刻むが、そのさい妻も戒名を受けて並べて彫っておき、生前は朱〔＝黄色がかった赤色〕を塗っておく風習があったことから出たことば。

赤い信女が子を孕む

夫を亡くした女性が男性と関係して妊娠することを皮肉った句。

参考 『誹風柳多留』に「石塔の赤い信女が子を孕み」、『折句式大成』に「石塔の赤い信女がまた孕み」などの句がある。

赤犬が狐を追う

（赤犬が、似たような毛色で体型も似ている狐を追いかけるということから）どれがどれだか混乱して区別がつけにくいことのたとえ。

垢が抜ける ⇩ 垢抜け(の)した

足掻きが取れない

〔「足掻き」は、馬などが前足で地面をひっかくようにすること〕もがいても自由に動けない。苦しい立場にあって、打開の策を講じることが

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com